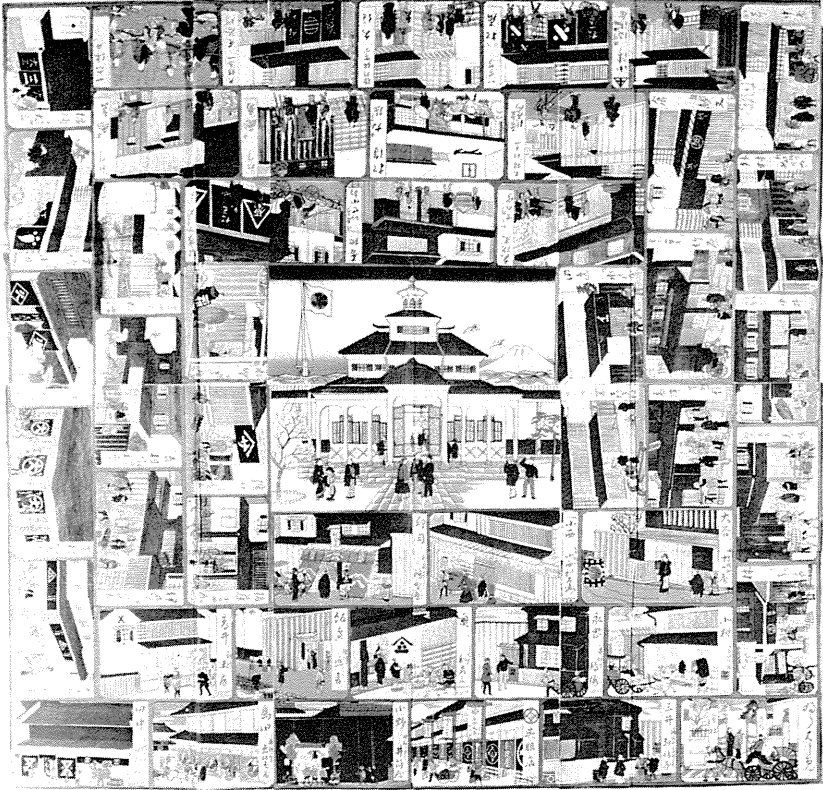


全盛富貴壽古録



「全盛富貴壽古録」 全図および三井両替店・呉服店拡大図

口絵 「全盛富貴寿古録」 全図および三井両替店・呉服店拡大図 七二・六×七一・八センチメートル

三井文庫には江戸時代から明治時代にかけての双六が七七点所蔵されている。口絵写真はその中の一つで「全盛富貴寿古録」と題された木版多色刷一枚物(六枚貼り継ぎ)の双六である。作者は一立斎重(二代目)、版元は人形町通具足屋、発行年は不明だが明治初期と推定される。

この双六は、上がり(中央)と振り出し(下辺右端)に東京為替会社が描かれ、その間の四区画には三井、小野、島田を始めとする東京の大商人の店舗が描写されている。実はここに登場する商人たちに共通するのは、単に富商であるのみならず、全員が東京為替会社の身元金出資者であることであり、この双六はその出資者たちを網羅しているのである(「東京為替会社社員身元金・申七月」(『日本金融史資料・明治大正編』第二卷、大蔵省印刷局、一九六一年)、岩崎宏之「明治維新期の東京における商人資本の動向」(西山松之助編『江戸町人の研究』第一卷、吉川弘文館、一九七二年)参照)。為替会社は、明治二年(一八六九)に政府の強い勧奨により特権的大商人を中心にして東京など全国八か所に設立された金融機関であり、わが国最初の会社組織で銀行の先駆形態とされるものである。口絵写真中央の、東京為替会社の塔屋共四階建の建物は、堀越三郎『明治初期の洋風建築』(発売所・丸善、一九二九年)によれば、蛸殻町二丁目に所在し、建築・取壊し年代及び設計者等いずれも不明であるが、その確実なる存在は明治四年から同九年まで、設計者は清水喜助ではないかとされている。以上のように、上がりと振り出しが同一という円環構造をなすこの双六は、この一枚の中に東京為替会社とその出資者たち、すなわち三井・小野・島田を中核とする明治初年における東京の大商人の結集体を全体として表現したものであり、まさに「全盛富貴」のイメージと合致するものと言えよう。そしてこの双六はそのような大商人の明治初年の東京における店の有様が窺えるという点において極めて興味深いものである。以下、この双六の展開順序を記す。紙幅に余裕がないので個々の商人名・業種などはふれえないが、この点については前掲岩崎論文を参照されたい。

(下辺) ふりはしめ↘三井駿河町両替店越後屋↘呉服店↘小野田所丁井筒屋↘島田尾張平恵比寿屋↘田中大佐馬丁田端屋↘(左辺) 大佐馬丁小津↘下村旅籠丁大丸屋↘大佐馬一川喜田↘丁吟堀留丁小林↘榎浦本至四六三↘(上辺) 一六休日↘大佐馬一長谷川↘深川佐賀丁久住↘いせ丁松居↘△小津深川油壺湯浅屋↘(右辺) いせ丁中条↘外村新大坂丁ぬのや↘金吹町両替店中井↘駒込通分高崎↘林よし丁よしや↘(下辺) 北村通四丁目囿↘永岡茅場丁鴻儀↘奥しんぱ和泉三↘飯島深川近喜↘高井新川米房↘(左辺) 伊井具ふく丁いせ吉↘吉村佐内丁和泉や↘芝田丁仙波↘(上辺) 新川本店鹿島↘新川中店鹿島↘松沢本至丁大孫↘本場材木や鹿島清左衛門↘(右辺) 倉麩丁越又↘室丁両替屋竹原↘高津せと物丁不↘(下辺) 大谷浅草代地十一屋↘小西茅場丁小西利左衛門↘郡司和泉はし鴻野屋↘(左辺) 後藤本丁四△↘浜口小あミ丁広吉↘水野本場遠徳↘(上辺) 村越長谷川丁田庄↘青地御藏いせ四郎↘久次米八丁はりての字↘(右辺) 田辺深川水戸屋↘深川はしか間屋喜多村↘上り (西坂)